

1984年度の改組に合わせて国立遺伝学研究所(遺伝研)に日本DNAデータバンク(DDBJ)が設置されることが決まると、人事や文部省への予算要求は遺伝研に委ねられた。所内は、木村資生を頂点とする集団遺伝学のグループと、いくつかの実験系遺伝学のグループに大きく分かれており、情報生物学という非実験系分野についての判断は集団遺伝学グループに任せられた。

木村は、自らの理論が国際的に受け入れられるまで戦い続け、自分にも他人に

木村氏中心に体制構築



も厳しい人柄だったという。研究室下アは特注で厚く、廊下で物音を立てることとは許されなかった。木村と廊下ですれ違った学生が立ち止まってあいさつしない、後で指導教員がやん

わり注意された。誰にでも心を開くタイプではなかったのかもしれない。

DDBJの担い手として木村に推薦が寄せられた中で、米国でデータバンク(D

深い宮田隆の教え子だった。木村にとっては、DDBJ招致に尽力した部下の丸山毅夫がリーダーとなり実務を宮沢が担うという体制は盤石なものと感じられたのであろう。

本でも構築するよう働きかけた金久は、実は有力な候補だった。もう一人の候補は、金久と同じく米国立衛生研究所に籍を置いていた宮沢三造だった。宮沢は、木村と研究上の交流が

DDBJの新設と同時に、京都大には生物情報解析するための研究室増設が認められた。京都からの国際電話を受けた金久は、自分自身がDBを作るよりも、その活用法を考えることに将来性を感じたという。

1988年ごろ、自

宮沢と金久はそれぞれ遺伝研と京都大の助教授として85年に帰国する。

作のタベストーリーを背にした木村資生(中央)

(伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員)